

歴史学研究会 編, 中澤達哉・三枝暁子 監修 『コロナの時代の歴史学』

まさに時宜を得た出版と言える。目次と著者を転記し(敬称略・副題略),併せて必ずしも章節の順に従わず,若干のコメントを記すにとどめる。拙速の紹介となることを諒とされたい。

第1章 感染症拡大の歴史的再検討・歴史学の位置

- ・COVID-19と「感染症の歴史学」(飯島渉)
- ・新自由主義下のCOVID-19(小沢弘明)

第2章 医療史・公衆衛生史のなかの感染症

- ・安政コレラ流行と蘭方医(海原亮)
- ・環境・感染症・公衆衛生(福士由紀)

第3章 感染症をめぐる政治と社会の分断・緊張

- ・新型コロナウイルスの副作用(中澤達哉)
- ・パンデミックに対峙する福祉国家の経験(古谷大輔)

第4章 感染症による現代国民国家の変質

- ・コロナ禍の世界からみる国家と国民の関係の変容(加藤陽子)
- ・コロナ禍と現代国民国家,日本,それに西洋史研究(池田嘉郎)

第5章 感染症が照らしだす人権と差別

- ・感染症と中世身分制(三枝暁子)
- ・「衛生」と「自治」が交わる場所で(石居人也)
- ・アメリカ社会とコロナ禍(貴堂嘉之)

第6章 感染症をめぐる格差・労働・ジェンダー

- ・日本古代の疫病と穢(今津勝紀)
- ・パンデミックとジェンダー分業(小田原琳)

第7章 感染症と歴史実践

- ・コロナ禍/オンライン授業のもとで「考える歴史学」を教える試み(大門正克)
- ・いま歴史研究に何ができるのか(若尾政希)
- ・忘却と変質の相克(北條勝貴)

飯島渉氏は、「感染症は社会を変えた」という言説が独り歩きしている状況を指摘し,「人間が感染症を利用して,社会を変化させた場合が多

い」と論ずる。「日本医史学会という学会があるが,歴史学の学会との関係は希薄」という付言も見過ごせない。

「人間が感染症を利用して,社会を変化させた」という観点から,小沢弘明氏もパンデミックからの復興の名の下に,わが国で知識資本主義,新自由主義,ニューノーマルが加速的に推進されようとしていると論ずる。中澤達哉氏は,ハンガリーにおいて首相独裁が実現したことを例に挙げて,非常事態下における民主主義などの諸価値の脆さを論ずる。加藤陽子氏は,第二次大戦に至る日本軍国化の過程を通して,緊急事態下においては国家だけでなく国民も国家防衛権論に傾斜すると論ずる。

海原亮氏は,安政5~6年のコレラ流行が,西洋医学が知識を脱して実用化する契機となったと論ずる。福士由紀氏は,20世紀前半中国において,公衆衛生の組織が,清朝以来の「保甲」から「単位」,更に「社区」へと変わってきたことを論ずる。

池田嘉郎氏は,(ハードな管理体制を敷いた)西欧モデルは(ソフトな対応をとった)日本のモデルとならなかったと述べ,今後,日本が外部に包括的なモデルを持つことなく進んでいくことが強調されたと論ずる。

今津勝紀氏は,古代日本の国家体制が生み出す貧困・病気・死と古代都城におけるその管理について論ずる。三枝暁子氏は,中世日本においてハンセン病が国家権力の介入なく自律的に排除されているように見えるのは,これを体制内に組み入れて救済する国家機能を持たなかったからだと論ずる。

貴堂嘉之氏は,コロナ禍下のBLM運動からアメリカ社会の感染症と人種差別の問題を論ずる。小田原琳氏は,ロックダウン中のイタリアにおけるケア労働に注目して,共同体が一部の偏った負担によって成り立っている権力構造を論ずる。

大門正克氏はオンライン授業の実践について報告し、若尾政希氏は若手研究者問題などに言及し、それぞれの歴史実践を語っている。

(町 泉寿郎)

[績文堂出版, 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-64 神保町ビル402, TEL. 03 (3518) 9940, 2020年12月, A5判, 174頁, 1,800円+税]